

父母のワーク・ライフ・バランスと祖父母による孫育てへの参加 —イギリスの現状と研究から考える—

佐藤 淑子（児童学科・教授）

はじめに

鎌倉女子大学学術研究所「子ども・子育て研究施設」の企画として、「かまくらプロジェクト」¹⁾が継続的に実施されている。昨年に引き続き、「親を支える祖父母アイデンティティの発達プログラム」において、筆者は「父母のワーク・ライフ・バランスと祖父母による孫育て—イギリスの現状と研究から考える—」を担当した。ワーク・ライフ・バランス（WLB）とは「職業役割」と「家庭役割」をバランスよく担うことである。その講義内容に基づき、本稿では、祖父母の子ども世代への支援、すなわち孫育てについて、日本とイギリスを比較する。

昨年、比較研究を報告したオランダが労働時間を短縮し、ワーク・ライフ・バランスの先進国といわれる（佐藤，2019a）のに対し、イギリスは日本と同じく、長時間労働の傾向が強い国である（OECD，2009：163）。長時間労働の社会であることに加え、女性の家庭内役割重視がイギリスと日本との共通点である（矢島，2012；大石，2016）。

本稿では筆者の行った日本とイギリスの父母のワーク・ライフ・バランスに関する質問紙調査の結果から両国の父母の育児の協同を概観し、イギリスの子ども世代を支える祖父母による孫育てについて文献研究を行う。

1. イギリスのワーク・ライフ・バランス

近年、合計特殊出生率と女性の労働力率の間には正の相関があることが明らかにされている（内閣府男女共同参画局，2004）。日本は、女性の社会進出が遅れ、男女のWLBが確立できない状況にあり、少子化の抑止が困難な国である。他方、上述のオランダなどは仕事と子育ての両立支援策や柔軟な働き方等の取り組みをここに推し進めた結果、「WLBをはかることが可能な社会」となった（矢島，2012）。

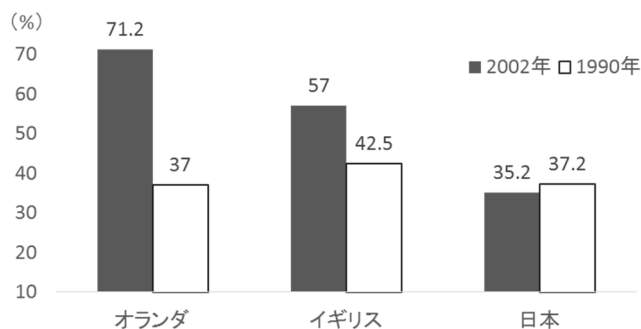
イギリスについて見ると、子どもの養育において家族、特に女性の役割が重視されてきたため、1990年代半ばの時点でも大陸欧州諸国と比較して出産・育児に関わる休暇や保育サービスの整備は大きく遅れていた（大石，2016）。その後、イギリスでは柔軟な働き方を可能とするWLB施策が2000年から推進されてきた（脇坂，2008；矢島，2012）。2000年の「WLB向上キャンペーン」、2003年施行の「フレキシブル・ワーキング法」、2007年の「仕事と家族法」である（矢島，2012：215）。その成果として、矢島（2012）は以下のよう

- 1) 女性の育休からの仕事復帰が増える。「仕事と家族法」を導入した企業ではより顕著。
- 2) イギリスの場合、女性の就労率そのものはWLB施策推進以前から上昇傾向にありM字型カーブ（年齢階層別女性労働力率が子育て期の30歳代を谷間とする）は解消されていた。近年の変化としては3歳未満の子どもを持つ女性の就労率が上昇した。

3) 2000年以降、出生率の回復がイギリスでは見られる。

なお日本では2007年に「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）」憲章が策定された。

ここで、オランダ、イギリス、日本の6歳未満の子を持つ母親の就業率のデータを比較する。1990年のデータでは3国間で大きな違いは認められないが、2002年ではオランダが71.2%、イギリスが57%、日本が35.2%である（図1）。オランダほどではないが、日本と比べるとイギリスの方が育児期の母親の就業継続が実現していると考えられる。



(資料) OECD, Society at a Glance 2005 池本(2007)の引用による

図1 6歳未満の子を持つ母親の就業率

また、より新しいデータ（2015-2017年）で末子が0-2歳の子を持つ母親の就業率の7か国の国際比較（竹沢, 2019: 38）を見ると、オランダは75.5%、イギリスは63.6%、日本は43.3%となっている。竹沢の報告では、日本の母親の就業率は他国と比べて低いが、その7割は週30時間以上就労しており、保育利用時間は長く、子どもと過ごせる時間は短い。

2. 乳幼児を持つ父母のワーク・ライフ・バランスと育児の協同の日英比較

【問題と目的】 父母のWLBと育児の協同とは深いかかわりがある（佐藤, 2011）。ここでは、日本とイギリスで実施した筆者の質問紙調査の結果から、乳幼児を持つ父母のWLBと育児の協同の比較研究の一部を報告する。

【方法】 筆者は2009年から2010年にかけて、日本の父母のワーク・ライフ・バランスと子育ての協同について東京都と福井県で質問紙調査を行った。その後、2010年から2011年にかけてオランダのA市とB市で質問紙調査を実施、調査結果を報告した（佐藤, 2015）。さらに、2016年から2018年にかけて、イギリス国内のA市とB市で質問紙調査を実施した。イギリスデータと日本データの調査時期には相違があるが、イギリスでは質問紙調査の研究協力者を得ることに時間がかかったことがその理由である。

日本では保育園・幼稚園の協力を得て、質問紙調査を実施した（佐藤, 2011; 2012; 2013）。有効なペアデータは366組である。イギリスでは、2名のイギリス人研究協力者を通して、保育所に子どもを預けている父母を対象に、質問紙調査を実施した。有効なペアデータは65組である。日本のデータ数が多いため、有意差の検定には、日本120組を無作為抽出し、イギリス65組と比較した。イギリスデータが少ないため、データ分析の際に学

歴は統制していない。

調査内容は、(1) 父母対象の調査内容①育児行動 (佐藤, 2011参照, 20項目: 5件法)、②育児感情 (佐藤, 2011参照, 14項目: 5件法)、③育児時間、④家事行動、⑤家事時間、⑥父母の理想の仕事と家事・育児分担、⑦子どもの性別しつけに関する考え方である。(2) 有職父母対象の調査内容: ①労働時間、②残業時間、③通勤時間、④育児休業取得である。

【結果と考察】

(1) 調査対象者の基本的属性

日本120組とイギリス65組の父母のデータに限定し、基本的属性である父母の年齢、子どもの数、最終学歴、就業形態を表1に示した。母親と父親の平均年齢は日本がそれぞれ35.9歳、37.8歳、イギリスが36.3歳、39.5歳である。常勤(フルタイム)は日本の父親が87.5%、イギリスの父親が78.5%である。常勤(フルタイム)の母親は、日本が33.3%、イギリスが26.2%である。無職の母親について見ると、日本は30.0%、イギリスは33.8%であった。日本とWLB先進国のオランダの間では著しい相違が見られたが(佐藤, 2015)、日本とイギリスの父母の就業形態は比較的似通っている。学歴については、四年制大学卒及び大学院卒の学歴比率は、母親では日本29.1%、イギリス76.9%、父親では日本は55.8%、イギリスは63.1%である。ちなみに、イギリスでは男性のほぼ2倍の女性が高等教育に就学すると展望されている。(OECD, 2014: 122)。

表1 調査対象者の基本的属性

	日本 (120組)		イギリス (65組)	
	母親	父親	母親	父親
平均年齢	35.9歳	37.8歳	36.3歳	39.5歳
範囲	25~46歳	25~52歳	27~46歳	28~54歳
子どもの数(平均)	1.81人		1.89人	
＜最終学歴＞ 人数(%)				
中学			2 (3.1)	6 (9.2)
高校	31 (25.8)	36 (30.0)	2 (3.1)	6 (9.2)
高専・短大	54 (45.0)	17 (14.2)	11 (16.9)	12 (18.5)
専門学校				
四年制大学	28 (23.3)	55 (45.8)	32 (49.2)	24 (36.9)
大学院	7 (5.8)	12 (10.0)	18 (27.7)	17 (26.2)
＜就業形態＞ 人数(%)				
常勤(フルタイム)	40 (33.3)	105 (87.5)	17 (26.2)	51 (78.5)
自営業	3 (2.5)	10 (8.3)	9 (13.8)	11 (16.9)
非常勤(パート)	41 (34.2)	3 (2.5)	17 (26.2)	1 (1.5)
無職	36 (30.0)	2 (1.7)	22 (33.8)	2 (3.1)
合計	120 (100)	120 (100)	65 (100)	65 (100)

(2) 有職父母の仕事時間の日英比較

日本とイギリスの有職父母の仕事時間を比較した(図1)。独立変数を国と性別、従属変数を仕事時間とする対応のない2要因の分散分析を行った。その結果、国の主効果、性別の主効果が有意であった。日本のほうがイギリスより長く働いている。また、日本とイギリス双方で父親のほうが母親より長く働いている。国と性別の交互作用は有意ではなかつ

た。

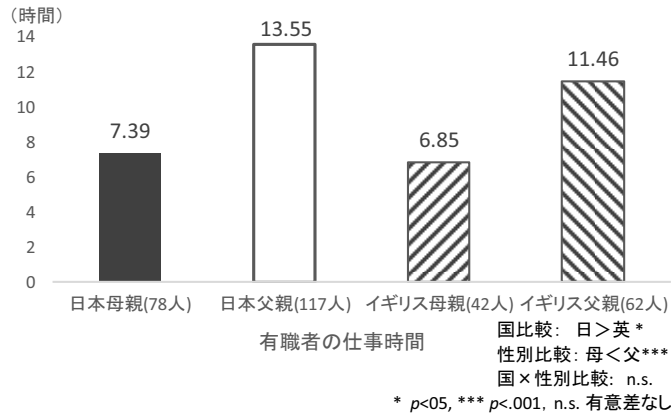


図2 仕事時間

(3) 父母の育児行動

日・蘭・英の全データを用いて最尤法・プロマックス回転による因子分析を行い、3因子が得られた(佐藤, 2019b)。第1因子「登園・降園と身体的な世話」、第2因子「遊びと身の回りの世話」、第3因子「しつけ」と命名した(佐藤, 2019)。各3因子について、国(日・英)×性別(母・父)の2要因分散分析を行った。3因子とも、国と性別の主効果と交互作用が見られた。「登園・降園と身体的な世話」については、母親では有意ではなかったが、父親では日本がイギリスと比較して0.1%水準で有意に低い。「遊びと身の回りの世話」については、母親では有意ではなかったが、父親では日本がイギリスよりも0.1%水準で有意に低かった。「しつけ」については、母親では有意ではなかったが、父親では日本がイギリスよりも0.1%水準で有意に低かった。育児行動各3因子の性別の主効果は両国ともに母親が父親よりも0.1%水準で有意に高かった。

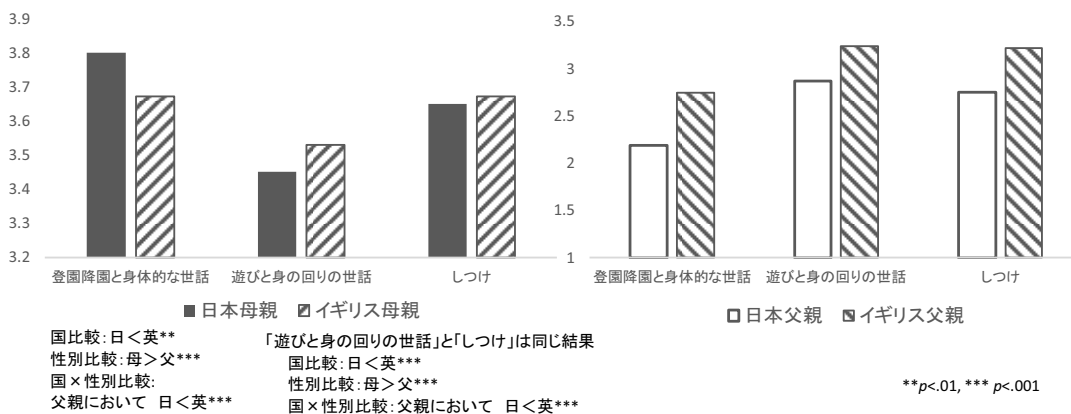


図3 夫婦の育児行動

(4) 父親の育児休業の取得状況

育児期の家族がWLBを図るうえで、父親の育児休業の取得は重要である。本調査の対象者でみると、日本は94.8%の父親が育児休業を取得していないが、イギリスの父親では

27.7%のみであった。言い換えると、イギリスでは7割以上の父親が育児休業を取得していることになる。

(5) 夫婦の理想の仕事と家事の分担

夫婦の理想の仕事と家事の分担を日本とイギリスで比較した。日本の母親は「妻が主に家事を担っており、夫が時々助ける」を選択した人が34.2%であるが、イギリスの母親は3.3%である。また、イギリスの母親は「妻が稼ぎ手で夫が主に家事を担う」を選択した人が40%いるが、日本は0%である。父親においては、日本とイギリスに大きな違いはみられない。

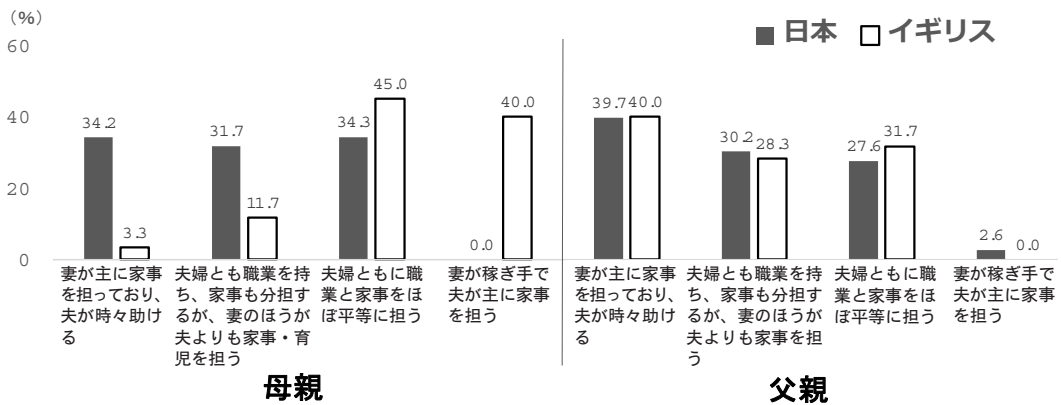


図4 夫婦の理想の仕事と家事分担

以上の結果から、イギリスの母親は、伝統的な性別役割分業にはとらわれていない人が大半であることがわかる。現在の就業形態の状況と、理想の仕事と家事の分担の選好についてはやや乖離があることが推測される。

米山 (2011) は日本とイギリスの女子学生の就労と家事・育児に関する意識調査を行った。イギリスの学生は夫と家事・育児の分担を平等にすべきであり、将来、家庭を持った時は分担していきたいと答えた学生が多かったが、日本の学生は夫婦の家事・育児の責任を平等にすることは現実には難しいと展望していたと報告している。

以上、質問紙調査の結果から、長時間労働の社会規範が根強いとされるイギリスであるが、日本と比較すると、父親の育児休業の取得率も高く、育児参加が著しく、WLBが取れていることが示唆された。

3. イギリスの祖父母による孫育てサポート

日本とオランダの祖父母による孫育ては、仕事と子育ての「両立型」の母親を積極的に支援する傾向が見られた (佐藤, 2019a)。上述のようにイギリスでも働く母親が増加する状況にあり、イギリスの祖父母による孫育ての動向を見る。

Drew ほか (1999) は臨床心理学の視点から、イギリスとアメリカにおける grandparenting (孫育て) と parenting (子育て) のかわりを検討した。ライフサイクルの中で、祖父母である期間は25年以上もあり、人生の約3分の1を占めること、そして親と祖父母のパートナーシップは家族全体にとっての恩恵であると述べた。

イギリスの保育・幼児教育に関する政策についてガンバロ・スチュアート・ヴォルドフォーゲル（2018）は、イングランド・スコットランド・ウェールズ・北アイルランドにおける地域差も視野に入れて検討し、以下の報告をしている。

「イングランドにおける親を対象とした2012年の年間調査では、3歳未満の子どもの59%は、親以外による保育を何らかの形で受けている。39%は公的な（有料）保育（33%は施設型保育、7%はチャイルドマインダーやベビーシッターによる保育）、33%は私的な（無償の）保育（主に祖父母）である。ウェールズにおける類似調査でも、同様のデータがみられる」（ガンバロほか、2018：50-51）。

また、大石（2016）は、イギリスの Department of Education（2016）のデータに基づいて、2014年から2015年にかけての保育の利用状況を子どもの年齢別にまとめている。0-2歳児では37%は祖父母を中心とする親族・家族によるインフォーマルなケアを受けており、3-4歳児、5-7歳児でもこの傾向がみられる。

さらに、Brown ほか（2015）は、1958年生まれの National Child Development Study の55歳のコホートの調査から、介護や孫育てのケア役割が祖父母自身の雇用や健康に与える影響について検討している。その結果、以下の報告を行った。

- ・55歳の調査対象者の約3分の2は親のケア、あるいは孫のケアを担っている。インフォーマル保育の担い手である祖父母は38%と増加している。少なくとも月に1回平均8時間預かる祖父母は57%である。
- ・祖父母の多くは50代に孫ができ、そして子ども世代が働きに出かけられるように孫の面倒を見る。祖母の42%、祖父の32%は週に1回のペースで孫のケアをしている。祖母は一週間に10時間、祖父は一週間に8時間預かっている。10人に1人は週に35時間、孫の面倒を見ている。
- ・週に10時間以上になると、体調が万全と答えた人は減少する。しかしながら、孫の面倒を見ることはいろいろな意味で **rewarding**（報いの多いもの）であると回答している。
- ・また、孫の面倒を見る時間が長い人はフルタイムの仕事を持つ割合が少ない傾向があることから、高齢の労働者にファミリーフレンドリーな働き方（policy）を適用することが望ましい。

以上のように、イギリスでは公的な保育以外に祖父母を中心とするインフォーマルケアを乳幼児期の子どもが受けていることが明らかにされている。大石によれば、低年齢児の30%が祖父母によってケアされている状況は、日本を含めた東アジア諸国と比較しても低くないという（大石、2016：172）。

4. 祖父母による孫育てと母親の継続就業及び少子化抑止とのかかわり

佐藤（2019a）では、オランダと日本の孫育てと育児期の母親の継続就業や少子化の抑止とのかかわりを論じた文献を概観した。イギリスの場合はどうだろうか。

Dench ほか（1999）は祖父母は近年、母親の労働参加を促すうえで、‘family guardians’（家族の保護者）となっていると述べている。労働参加するとき、多くの母親には保育費が負担になることと、子どもを保育所に預けることへのためらいが足枷となるが、祖父母はこのギャップを解消する存在とみなされるとする。そして、祖父母の側にも祖父母役

割を果たす経験が高いレベルの満足をもたらすとした。

Kanji (2018) は祖父母によるケアが、母親の就業率と就業時間を向上させるかについて検討した。イギリスの母親の労働参加は漸次向上し、2014年には69.6%の母親が就労している。しかしながら、イギリスの保育コストはヨーロッパ内でも高額であり、祖父母による補完が重要であるとした。調査の結果、祖父母の孫育てへの貢献は、祖父母によるサポート有群と無群の母親の就業率に33%の開きがあると報告した。また、イギリスでは女性の高学歴化が進んでいるが、母親の高学歴化に伴う雇用機会が、祖父母によるケアの条件となるかについても考察し、母親が高学歴の時に、祖父母がより孫の世話をすることを見出している。但し、イギリスの年金開始年齢の上昇に伴い、孫育てと、祖父母自身の収入を伴う労働との両立が課題となっていると述べる。イギリスでも祖父母世代のWLBが今後の課題となることがうかがえる。

祖父母の少子抑止に与える影響については、Tanskanen ほか (2014) が、子ども世代の第2子の誕生に与える祖父母の影響を検討し、父方の祖父母との交流は第2子の誕生を促進すると考察した。但し、祖父母と孫との交流を検討する際に、直に会うことに限定したが、今後は電話やインターネットによるコンタクトを含めることが必要だとしている。

5. イギリスの孫育ての特色

イギリスの孫育てを論ずる上で、イギリスが階級社会であること (佐藤, 2001: 61-62) は重要な側面である。そのため、祖父母の属する社会階級が孫の社会階級に与える影響の検討を継続的に行ってきた。どの社会階級に生まれたかによって、学歴や社会階層が規定されることが研究課題となる背景には、子どもの持つポテンシャルが社会・経済的な環境による影響を受けることを懸念することに発している。

ここでは、階級社会を背景として、イギリスの祖父母の孫の人生に与える影響を捉えた研究を二つ紹介する。

まず、イギリスの祖父母の孫育ての研究には、祖父母の社会階級が孫の aspiration に与える影響を検討したものがある。aspiration とは特定の目標を達成したいという大望である。Moulton ほか (2015) は、7歳児の持つ大望に与える祖父母の社会階級の影響を検討し、父方の祖母の社会階級が孫の大望に影響を与えていたと考察している。家族は文化的・経済的資産を何世代にも渡って蓄積しており、親から子どもへの直接的な影響のみを見るのではなく祖父母の間接的な影響を含めて検討するべきであるという問題意識を示している。

また、Zhang & Li (2019) は祖父母の経済的資産の孫のライフコースに与える効果を検討した。思春期の子どもの職業への aspiration、成人してからの学歴、職業における達成の3つの変数を調べた。起業家の祖父母は、自分の子どもが起業していない場合でも男子の孫が起業の仕事に就くことに強いインパクトを与えていた。親の属性やその他の変数を統制しても、祖父母の社会階層が孫の人生におけるチャンスと選択の有意な予測変数となっていた。祖父母の長寿化は孫の達成に実質的に貢献し、孫の価値態度に影響を与えると考察している (Zhang & Li, 2019: 190)。祖父母は、孫のライフコースにおいて、孫の人生のチャンスを形作り成人期の学歴と社会階級を規定すると結論付けた。

6. 祖父母と思春期の孫とのかかわり

Tan ほか (2010) は、祖父母の長命化と働く母親の増加により、これまで以上に祖父母が孫育てにかかわっているとされるが、祖父母の役割については可視化されていないとし、新たに、孫の視点から祖父母のかかわりを検討した。イングランドとウェールズの思春期の子ども (11-16歳) への調査から、祖父母が、思春期の孫にも多くかかわっていることを明らかにしている。オランダの祖父母研究では Bovenberg (2005) が、親世代は時間がなく、子育ての経済的負担も大きい (time crunch and money bind) ためにゆとりある祖父母世代の支援が重要であると主張した。これと同様に、イギリス研究においても、Tan ほか (2010) が親世代はお金も時間もゆとりがない (money and time poor) ので、祖父母がその不足を補っていると述べている。そして、祖父母世代と親世代の良好な関係が、祖父母と孫のかかわりを促進するとした (Tan, 2010 : 1009)。思春期の孫へのかかわりはより年齢の低い孫と比べて少なくなることが示唆されているが、何よりも祖父母と孫の間に情緒的な絆が形成されていれば、成人期になっても交流が続くことを報告している。

Attar-Schwartz ほか (2009) もイングランドとウェールズの11-16歳の子どもと祖父母の交流を検討した。孫が思春期になると、仲間とのかかわりがより重要になり、祖父母との関係は希薄化する傾向はある。しかしながら、親と祖父母の関係が良好であれば、祖父母と孫の愛着関係は崩れないと述べている。日本・オランダと同様に (佐藤, 2019a) 母方の祖父母のほうが孫とよりかかわることを見出している。加えて、男性が家庭に関与することがこれまで以上に多くなってきていることから、祖母のほうが祖父より孫とかわるとされた傾向が近年変化していると考察している。

Tanskanen & Danielbacka (2012) は祖父母の孫育てへの貢献が、母方祖父母と父方祖父母により異なるかどうかを検討した。思春期 (11-16歳) の子どもの SDQ (the Strength and Difficulties Questionnaire) のデータ分析を通し、母方の祖母とのかかわりが、孫の情緒面・行動面の問題を低減すると述べた。Attar-Schwartz ほか (2009) と同様に、祖母だけでなく、母方の祖父の重要性が増している傾向にも触れている。Danielbacka & Tanskanen (2012) は祖父母と孫とのかかわりの規程因として、祖父母の家系・孫の年齢・祖父母の健康・祖父母の就業の有無・物理的距離などを検討した。ここでも、思春期には仲間との付き合いが多くなり家族から離れていくが、思春期を過ぎるとまた、近い関係に戻ることを示唆している。祖父母の就業状況としてはフルタイム・パートタイム・無職の祖父母の群間で比較し、母方か父方であるかも含めて検討している。無職であることは健康状態ともかかわるので一概には言えないが、パートタイム労働の祖父母のかかわりがより顕著であることが示唆された。

7. 考察

以上のように、日本とイギリスの祖父母世代の孫育てへの参加について、比較検討した。最後に、日本とイギリスの共通点と相違点を整理して本稿の結びとしたい。なお、紙面の都合上、日本の祖父母による孫育てへの参加は、以前の報告 (佐藤, 2019a) により詳しく記述しているのでそれを参照されたい。

まず、祖父母 (grandparents) と孫 (grandchildren) の交流を子ども (parents) が加減する立場にあることが共通している。それから、母方祖父母の孫育てへの参加は父方祖父

母の支援より顕著であることも両国の共通点であった。

さらに、祖父母と思春期の孫とのかかわりについては、停滞する時期もあるが、愛着関係が形成されていれば、その後も交流が継続することも共通している。

相違点としては、まず、日本と同様に長時間労働が顕著な国として位置づけられるイギリスの父親のほうが日本と比較するとまだしもワーク・ライフ・バランスが取れており、育児休業の取得や育児参加が著しかったことである。このことは、孫育てに参加するイギリスの祖父母の負担の度合いにも影響する可能性が高い。また、上述の竹沢（2019）の報告にもあったように、日本は育児期も7割の母親が週30時間以上働く状況にあり、且つ柔軟な働き方が保障されていない（大石・守泉，2011）ことも、日本の祖父母の心身の負担を大きくするだろう。

二つ目の相違点として、イギリスは階級社会であり、祖父母が孫の達成意欲の向上にかかわり、ひいては孫のキャリア形成と社会階層に影響を与えるという研究がなされていることである。

日本とイギリス、さらに昨年報告したオランダ（佐藤，2019）を含め、父母のワーク・ライフ・バランスを向上させるためには、祖父母の孫育てへの参加が公的保育と祖父母等のインフォーマルな保育を柔軟に組み合わせた支援として極めて重要であることが示唆された。そして、祖父母の孫育てへの参加を促進する際に、祖父母世代のWLBについて配慮することも今後の課題となることが展望される。

1) 祖父母アイデンティティの発達プログラムの内容は以下のとおりである。

2019年9月17日：講座「高齢期の発達心理学」（鎌倉女子大学 佐藤淑子）・実技「健康づくりに向けたムーブメント教育法の体験」（鎌倉女子大学 飯村敦子）

2019年9月27日：講座「地域における孫育て、たまご育てを考える」（NPO 法人孫育て・ニッポン理事長 棒田明子氏）

2018年10月4日：講座「子育て、世界の動向～イギリスとの比較～」(佐藤淑子)・実技「子育て支援に活かすムーブメント教育法の体験」(飯村敦子)

引用文献：

- Attar-Schwartz, S., Tan, J-P, & Buchanan, A. (2009). Adolescents' perspectives on relationships with grandparents: The contribution of adolescent, grandparent, and parent-grandparent relationship variables, *Children and Youth Services Review*, 31, 1057-1066.
- Bovenberg, A.L. (2005). Balancing Work and Family Life During The Life Course, *De Economist*, 153, 399-423.
- Brown, M., Dodgeon, B. & Goodman, A. (2015). Caring responsibilities in middle age: Evidence from 1958 National Child Development Study at age 55, Institute of Education, University of London. < [http : cls.ucl.ac.uk/wp-content/uploads/2017/06/NCDS-briefing-paper-Caring-responsibility](http://cls.ucl.ac.uk/wp-content/uploads/2017/06/NCDS-briefing-paper-Caring-responsibility) > (2019年12月24日)
- Dench, G., Ogg, J. & Thomson, K. (1999). The role of grandparents, *British Social Attitudes the 16th report: Who shares New Labour values?* Jowell, R. (eds.), Ashgate, 135-156.
- Drew, L.M., Richard, M.H. & Smith, P.K. (1998). Grandparenting and its Relationship to

Parenting, *Clinical Child Psychology and Psychiatry*, 1359-1045.

ガンバロ・スチュアート・ヴォルドフォーゲル (2018). 保育政策の国際比較 明石書店
池本美香 (2007). 乳幼児期の教育・保育制度のあり方～諸外国の政策動向をふまえて～
(<https://www.rieti.go.jp/jp/events/bbl/08061101-ikemoto.pdf>) (2019年11月1日)

Moulton, V., Flouri, E., Joshi, H. & Sullivan, A. (2016). The influence of grandparents' social class on children's aspirations. *British Journal of Sociology of Education*, DOI:10.1080/01425692.2015.1093407

内閣府男女共同参画局 (2004). 少子化と男女共同参画に関する社会環境の国際比較調査
(<http://www.gender.go.jp/danjo-kaigi/senmon/syoshika/houkoku/pdf/honbun1>) (2013年8月1日)

OECD (2009). 国際比較：仕事と家族生活の両立 OECD ベイビー & ボス総合報告書
明石書店

OECD (2014). OECD ジェンダー白書 明石書店

大石亜希子・守泉理恵 (2011). 少子社会における働き方—現状と課題—樋口義雄・府川哲夫 (編) ワーク・ライフ・バランスと家族形成—少子化社会を変える働き方 (13-29)
東京大学出版会

大石亜希子 (2016). 内閣府平成27年度少子化社会に関する国際意識調査報告書 第3章 イギリス
(<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h27//zentai-pdf/index.html>)

佐藤淑子 (2001). イギリスのいい子 日本の子 中央公論新社

佐藤淑子 (2011). ワーク・ライフ・バランスと乳幼児を持つ夫婦の育児の協同—日本の中の多様性— 鎌倉女子大学紀要, 18, 15-26.

佐藤淑子 (2012). 父親と母親の職業生活及び家族生活と家事・育児行動. 鎌倉女子大学紀要, 19, 25-35.

佐藤淑子 (2013). 育児期家族の生活と心理. 鎌倉女子大学紀要, 20, 1-10.

佐藤淑子 (2015). ワーク・ライフ・バランスと乳幼児を持つ父母の育児行動と育児感情：日本とオランダの比較. 教育心理学究, 63(4), 345-358.

佐藤淑子 (2019a). 父母のワーク・ライフ・バランスと祖父母による孫育て—日本とオランダの比較. 鎌倉女子大学学術研究所報, 第19巻, 77-88.

佐藤淑子 (2019b). 父母のワーク・ライフ・バランスと育児の協同：日本・オランダ・イギリスの比較. 異文化間教育学会第40回大会発表抄録, 182-183.

竹沢純子 (2019). 仕事と育児の両立に関する国際比較, 季刊 個人金融 2019冬
(<http://www.yu-cho-f.jp/wp-content/2019winter-articles04pdf>) (2019年12月24日)

Tan, J-P., Buchanan, A., Flouri, E., Attar-Schwartz, S. & Griggs, J. (2010). Filling the Parenting Gap? Grandparent Involvement With U.K. Adolescents. *Journal of Family Issues*, 31 (7) 992-1015.

Tanskanen, A.O. & Danielsbacka, M. (2012). Beneficial effects of grandparental involvement vary by lineage in the UK. *Personality and Individual Differences*, 53, 985-988.

Tanskanen, A.O., Jokela, M., Danielsbacka, M. & Rotkirch, A. (2014). Grandparental Effects on Fertility Vary by Lineage in the United Kingdom. *Human Nature*, 25, 269-284.

Kanji, S. (2018) Grandparent Care: A Key Factor in Mothers' Labour Force Participation in the

UK. *Journal of Social Policy*, 47 (3), 523-542.

米山珠里 (2011). 日本・イギリスの女子学生の就労と育児に関する意識調査の一考察
弘前学院大学社会福祉学部研究紀要, 11, 46-53.

脇坂明 (2008). 英国におけるワーク・ライフ・バランス 佐藤博樹 (編) ワーク・ライフ・バランス 仕事と子育ての両立支援 ぎょうせい

矢島洋子 (2012). 「イギリスにおけるワーク・ライフ・バランス」 武石恵美子 (編)
『国際比較の視点から日本のワーク・ライフ・バランスを考える』(pp.213～251)ミネル
ヴァ書房

Zhang,M. & Li,Y. (2019). Family fortunes : The persisting grandparent's effects in contemporary British society, *Social Science Research* 77, 179-192.